

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 教育学部・2年

氏名: 河野 裕通

授業科目名	理科教育特講
研修先(国・地域) 滞在地	ドイツ連邦共和国(ミュンヘン・オルデンブルク)
研修期間	平成30年2月15日(木) ~ 平成30年2月27日(火)
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回初めてのドイツ、そして初めての海外を訪問して、様々な刺激を受けた。</p> <p>訪問したドイツ博物館は1日では回りきれないほど大きな博物館で、面積や展示品数の多さにただただ驚いた。ドイツ博物館の科学ブースでは、ただ見て回るだけでなく、実際に動かしてみたりボタンを押してみたりすることで展示物に手を触れることができるハンズオン展示が多く見られた。これのおかげで子供たちは展示を見て回るのに飽きがこないどころか、ずっと楽しく見て回れるし、探究心が刺激され理解力も深まるので、ハンズオン展示を多く導入しているという工夫は非常に素晴らしいと感じた。実際に子供たちに活動させて好奇心を育てさせる教育があると知った。</p> <p>今回のドイツ訪問では他にも、基礎学校や職業教育校、大学など実際の学校現場にも足を運ぶことができた。日本の小学校にあたる基礎学校で、実際に見学させていただいた理科の授業では、6人グループ2つと4人グループ2つの形の席でそれぞれ実験を行い、それぞれのグループに大人が1人配置されていた。1クラス30人程度の児童を担任の先生1人が指導する授業スタイルが主流である日本の小学校とは異なることが明らかとなった。だからこそ、日本の学校で行われる授業は、生徒一人ひとりの様子を確認できるように、机間巡視が大切になってくることを理解できた。また、日本でいう中学生の年代の生徒が在籍している職業教育校では、専門的な内容を学んでいることを知った。技術科の職業教育校では、レーザーカッターなど最新の機械を使用してものづくりを行うという、実用的な活動を行っていた。大学で行われた中学生向けの化学教室も実際に見学したが、日本の中学校と同じような内容の実験で終わらず、水質調査など実用的な内容を行う実験を行っていた。中学生くらいの年代から職業に関する具体的・実用的な内容を学ぶことができるドイツの教育の良さを感じた。日本ではなかなか実用的な内容を学んだり活動をしたりすることができないので、学校で教えた内容が将来どのように役に立つのかということもできるだけ具体的に教えることで、学習内容の大切さを伝え、学習意欲を高めさせていく必要があると感じた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>ドイツ博物館で多く見たハンズオン展示は、鹿児島市立科学館でも多く見られることを改めて知った。ハンズオン展示で理解を深めるだけでなく好奇心を育てるためにも、科学館の魅力を子供たちに伝えて足を運ばせたいと感じた。また、私が将来教職に就いたときは、ドイツの基礎学校のように多くの大人を授業指導にあてることはできなくても、どのように一人一人の子供たちに工夫した指導を行えるか考えていきたい。鹿児島は1クラスに多くの子供たちが在籍する学校もあれば、少人数の複式学級のある学校など様々なので、ドイツ訪問で得た様々な指導法の工夫を踏まえて、それぞれの指導について考えたい。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 教育学部・2年

氏名: 新留 勢矢

授業科目名	理科教育特講
研修先(国・地域) 滞在地	ドイツ連邦共和国(ミュンヘン・オルデンブルク)
研修期間	平成30年2月15日(木) ~ 平成30年2月27日(火)
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の研修を通じてドイツと日本の教育環境の違いをひしひしと感じた。まず、一番感じたのは、ドイツの生徒は説明する能力がとても高いということだ。見学した授業では先生に指名された生徒は黒板前まで行き、どのように考え、どのように式を使い、どんな答えが出たのかを黒板を用いて説明した。そこで間違っていたり解ききれなかった時、他の生徒が挙手し間違いを指摘する。その間、先生は見ているだけで助言や指摘はしなかった。日本では回答を述べさせることはあっても解説をさせることはあまりない。その上、他の生徒が間違いを指摘することはまずないだろう。自分の意見や考えを言語化し、相手に伝えることは集団の中で生きていく上で必要な能力であり、経験することでしか養われないので、小・中学校の時点でこの環境の中にいることは生徒の言語化能力を格段に進歩させると思う。日本の教育ではこの時間にこの単元を教えるといった細かな計画が立てられているので生徒主体の授業を作ることはなかなか難しいと思うが、説明・プレゼン能力、内容理解ともに効果的だと考えられるので取り入れていくべきだ。</p> <p>また英語教育も優れていると思った。英語の授業を見学したわけではないので、どのような教え方なのかはわからないが、中学生以上のたいていの人は英語を使っていた。日本の中学生で英会話ができる人はほんの一握りだろう。日本から出なければ英語を話せるようになる必要がないと考える人も多々いる。これは日本が島国で他国と隣接しておらず、英語の会話を必要とする機会が少ないことも原因している。日本では学力テストに重点を置いているため、読めるけど話せないといった人たちが生まれやすい。</p> <p>日常に活用するための英語ではなく、テストで点を取るための英語学習になっているのだ。2020年に東京オリンピックがある。鹿児島にも少なからず外国人が訪ねてくるはずだ。残り2年で大きな変化は見込めないが、学び始める年齢を早めること。読む、書くだけでなく、聞く、話すに重点を置くことが大切になってくる。英語の指導方針は少しずつ実践的なものへと移り変わっていかなければならない。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今回の研修で自身の英語能力・コミュニケーション能力の低さを痛感した。日本に住んでいても、グローバル化が進む現代を生きていくために、英単語の語彙力を身につけること。また日本語英語関係なく、相手の顔や目を見て話すこと、相手の話を聞きながら相槌を打つことといったコミュニケーション能力を身につけることの大きく2つが今回の研修から立てた大学在学中の目標である。英語の勉強は別途必要になるが、コミュニケーション能力の向上については友人との会話やアルバイト中など常に気をつけ、経験していくことで身につけていきたいと思う。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属(学部(研究科)・学年): 教育学部・2年

氏名: 園田 怜央

授業科目名	理科教育特講
研修先(国・地域) 滞在地	ドイツ連邦共和国(ミュンヘン・オルデンブルク)
研修期間	平成30年2月15日(木) ~ 平成30年2月27日(火)
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の実習を通じて得た成果として最も大きなものとして、個人の能力に応じた教育・取り組みを行っていくことが大切であり、その教育・取り組みを行っていくためのしっかりとした、事前の準備、そして対応が必要であるということを学んだことである。私が特にこのことを考えたこととして、ドイツのオルデンブルクという都市にある小学校を訪れたときである。私は、この小学校で授業を観察させてもらった。教室には児童が約20人と教師が5人いた。はじめは、担当の先生が授業をしており、残りの先生は副担任のような先生であると考えていた。しかし、実際に授業を観察しているうちに、副担任だと思っていた教師たちは、日本でいう特別支援の教師たちであることが分かった。このクラスには3人の支援が必要な児童が所属しており、他の児童と一緒に学んでいた。このときに行っていた授業は、理科の「どうしたら電気が流れるのだろうか」という内容であった。授業のはじめと終わりがある目当てや授業内容の確認、そしてまとめだけは教室の前に児童が集まって担任から説明を聞き、そのほかはグループでの活動であった。このグループでの活動の時に児童一人一人にそれぞれ実験に必要な材料を渡されており、確認していった。このときに、支援が必要な児童には同じ勉強内容のその児童が実験を行いやすいように、専用の材料が準備されていたのに気づいた。そして、その児童に付き添いの先生がいて一緒に学んでいた。グループは4~5人であり、時折相談しあったり、アドバイスしたりしていた。支援が必要な児童もそうでない児童もそこでは、同じ教育内容を同じ進捗で行うことができおり、そのためには、事前の準備や計画が重要であると感じた。どのようにしたら皆が同じように学ぶことができるのか、担任として、また、学校として、一人一人の児童についての理解を十分にし、そのうえで個性や特徴を生かした、その児童にあった教育を行うことができるというような態勢をとることが大切だとこの授業を見て考えた。このような考えは、学校教育ではとても大切なことであると考えるとともに、学校教育以外の場面でも大切な考え方であると思われる。このような考え方で身近にあるものとして、バリアフリーのものが挙げられる。現在バリアフリーなものが増え続けている。そのように、皆が平等であるということをしかりと理解していくことが重要である。私は将来教師になりたいと思っている。今回の研修で最もこの皆が平等に学んだり過ごしていくということを考えさせられた。この経験から学んだことを将来の教育にもしっかりと意識をして、まずは児童としかりと向き合い、そして、児童一人一人の性格や特徴を理解し、皆が同じように学んでいくことができる場や環境を作っていけるようになりたいと考える。また、今回の研修を通じて得た成果としては、もっと語学力の向上が必要であり、そして、グローバル化社会というものを改めね体感したことである。ドイツではもちろんドイツ語が話されている。私はドイツ語は一切話すことができずにとて不安な気持ちのまま研修に臨んだ。しかし、ドイツの人々と話すときは、英語を話すことができる人が多く、研修の間、英語を話すことによって様々なコミュニケーションをとることができた。小学生はまだ英語を話すことができなかつたけど、中学生や高校生ぐらいの年になると、英語でのコミュニケーションをとることができた。このことから、英語は世界の共通言語であり、外国の人とコミュニケーションをとるうえで重要なものであると痛感した。また、研修の中で、ミュンヘンやオルデンブルクをはじめ多くの都市を観てまわることができた。その時に時々、日本語での案内があったり、街ゆく人たちを見ても様々な国からの人々がドイツを訪れていたり、生活をしたりしていた。この光景を見たときに一気にグローバル化社会であるということを感じたとともに、これからの社会ではもっとグローバル化が当たり前になってくると感じた。そのため、これから私たちは、もっと英語力が必要であったり、世界共通の看板や案内標を用いたりすることが大切であるということ考えた。以上のことが、今回の研修を通じて得た成果である。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>研修後の抱負としては、研修を通じて得た成果でも述べたように、私は将来小学校教師になりたいと考えている。教師となり、児童を教育するに当たって、しっかりと一人一人の児童と向き合うことができ、障害を持つ子も持たない子も一緒になって学ぶことのできる環境づくりをしていきたいと考える。このような考えを実現するためには、学級経営の仕方をはじめ、特別支援についても理解を深めていく必要があると考えた。そのため、大学院まで進学し、特別支援の免許を取得してから、教育の現場に立ちたいと考える。そして、皆が平等に学ぶことができる環境を作りつつ、これからのグローバル化社会に向けて、英語の力も私自身が身につけ、児童に教育を行っていけるようになりたい。今回の研修での貴重な経験を忘れずに、今回感じたことや学んだことを、これからの学びの中で少しでも活かしていきたいと考える。</p>	